

2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	不妊治療経験に関する産後の意味づけと影響
キーワード	①不妊治療、②母親、③子育て

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	シダ ジュリ 信太 寿理
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	中京学院大学短期大学部 保育科 専任講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	愛知学泉大学 家政学部 こどもの生活学科 准教授
プロフィール	教育心理学修士(名古屋大学大学院)、心理学博士(名古屋大学大学院)、臨床発達心理士 博士論文のテーマは、「青年期前期における母子の養育態度認知に関する研究」であり、主に思春期・青年期の母子に関する養育態度についての研究を行っている。 現在は、不妊治療を経験した母親に対しての意味づけに対する研究や、子どもの偏食について悩む親子に対しての心理的・栄養的なアプローチなどに興味を持ち、研究を行っている。

1. 研究の概要

不妊治療は近年重要視されてきているが、不妊治療・不妊経験の意味づけや、不妊治療・不妊経験と母親の子育てやメンタルヘルスへの影響を長期的な視点で検討した研究はわずかであり、研究を行う必要性が高い。

そこで、本研究では、不妊治療・不妊経験について、母親の産後の意味づけについて調べる。さらに尺度化を行い、子育てや母親のメンタルヘルスへの影響を検討する。

2. 研究の動機、目的

不妊治療では、子を持たないことへの焦躁感や、精神的ストレス、子や家族に対する責任感、治療への不安や自尊心の喪失などを経験するとされている(白井, 2007)。しかし、このように人生においてストレスフルなイベントを経験しているにも関わらず、妊娠・出産後の不妊治療・不妊経験の意味づけについて検討した研究は非常にわずかである。意味づけ(Meaning making)はストレスフルなライフイベントからの適応過程を説明する概念として近年注目されている。ストレスフルな出来事が起きたとき、その体験について意味づけを行うことで、その後の適応や人生に対する有意味感の回復へと繋がると考えられている(堀田・杉江, 2013)。

不妊治療を終えると、母親はそのまま妊娠・出産へと至る過程が一般的であり、その場合には十分にストレスへの対処がなされないまま、また新たな別のストレスにさらされるということになる。そのため、不妊治療の後の妊娠は、非常に喜ばしいことである一方、不妊治療を経て子どもをもった母親・父親が子どもへ虐待などをするという不適応を起こす例が報告されている(岡島・我部山, 2005)。このように、不妊治療はその期間中もさることながら、その治療を終えた後にも影響を与える出来事であると考えられる。

また、妊娠・出産を終えると子育てが開始する。不妊治療を経験した親の子育て(養育態度)

について、国内ではほとんど見られないが、海外ではいくつかわかってきたことがある。例えば、Glazebrook et al., (2003)では、不妊治療（IVF：体外受精）を行って出産した親と、自然妊娠の親を比較したところ、不妊治療をした場合の方が、養育に関して否定的にとらえていることが示唆された。さらに、Hahn & DiPietro (2001)では、IVFを経て出産した方が自然妊娠で出産する母親よりも、保護的な養育になると示している。

母子関係の良好さの指標の1つの視点として、古くから養育態度は複数の次元から捉えられてきたが、保護的な養育というのはあくまでも養育態度の一側面である。例えば、バウムリンンドの養育態度理論 (Baumrind, 1967) は、非常によく用いられている。暖かさなどを含んだ態度である応答性と、お互いに話しあいをしたり、対立したりするような態度である要求性という2次元がある。この応答性と要求性がともに高い場合に、権威的な養育態度のスタイルという適応的なスタイルが見出されている (Maccoby & Martin, 1983)。子育ては非常に長きにわたって続くものであり、1側面からではなく、統合的に捉えるべきであると思われる。しかし、日本では不妊治療後の親の子育てについての研究がほとんどない。また、日本は伝統的性役割感が強く残っており、海外に比べ母親への子育ての責任感が強いことも考えられる。そのため、日本独自の研究が必要である。

以上のような動機から、本研究では、以下のように検討を行う。

調査1：産後どのように不妊治療・不妊経験について、意味づけているのかを検討する。

調査2：調査1を踏まえ、不妊治療・不妊経験の意味づけの影響を検討する。

3. 研究の結果

●調査1

不妊治療・不妊経験の後に出産し、現在育児中の母親を対象としたweb調査を実施した。

対象：不妊治療を経験した後に出産し、現在育児をしている母親131名（平均40.12歳、 $SD=8.16$ ）

方法：インターネットリサーチ会社に依頼した。不妊治療を経験しているか、現在子育てをしているかなどの質問を組み合わせることで、条件にあった対象者にアンケートを実施することができた。

「ご自身の不妊治療や不妊の経験について、今はどのように思われていますか。思いつくままに書いてください。」という教示の後に、自由記述を依頼した。その結果121名から記述データを得たため、そこから抽出をし、「やっと子どもを授かることができた」「子どもが産まれてきてくれてよかった」「治療が辛かった」「なぜ自分だけ妊娠できないのだろうと思っていた」など30項目を作成した。

●調査2

次に、調査1を踏まえて調査2を行った。

対象：不妊治療を経験後に出産し、育児中の母親260名（平均年齢39.17歳、 $SD=7.74$ ）

方法：調査2もインターネットリサーチ会社に依頼し、実施した。はじめに性別や年齢、現在の就労状況（フルタイム、パート、主婦）、世帯収入、不妊治療で医療機関にかかっていた期間、不妊治療で行った内容（卵管造影検査などの検査や、タイミング法、人工授精（AIH）、顕微授精（IVF）など）と期間なども併せて尋ねた。

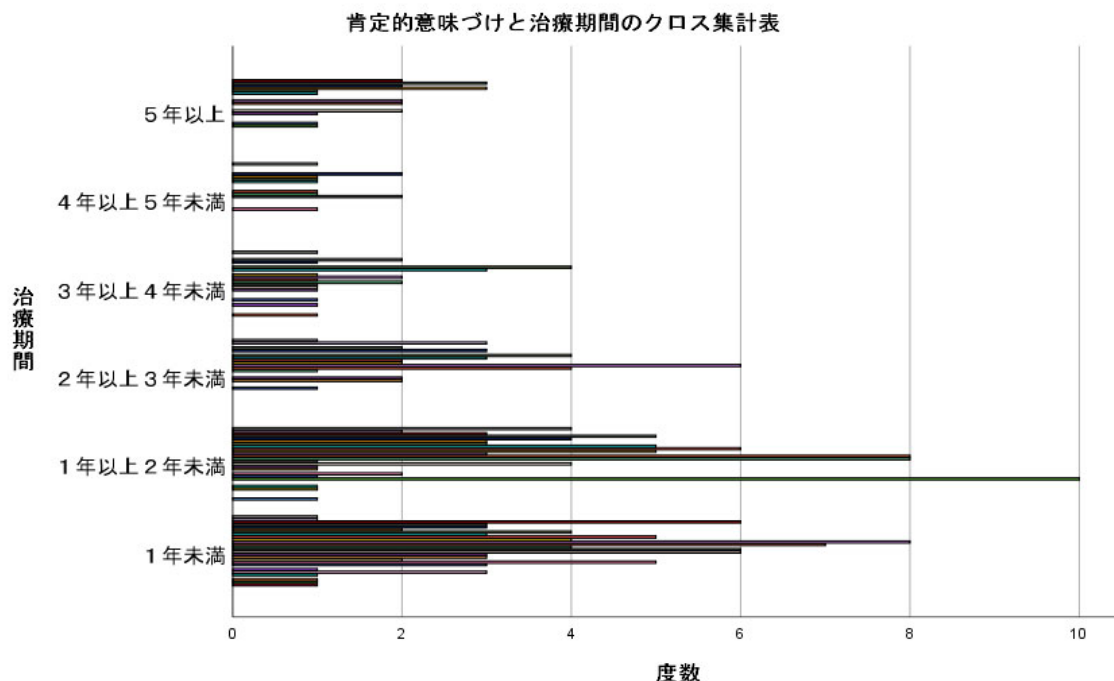
さらに、①調査1から抽出した30項目の質問、②育児感情尺度（荒巻，2008）、③育児幸福感尺度の短縮版（清水・関水・遠藤，2010）、④夫婦のコミュニケーション態度（平山・柏木，2001）を尋ねた。

結果と考察

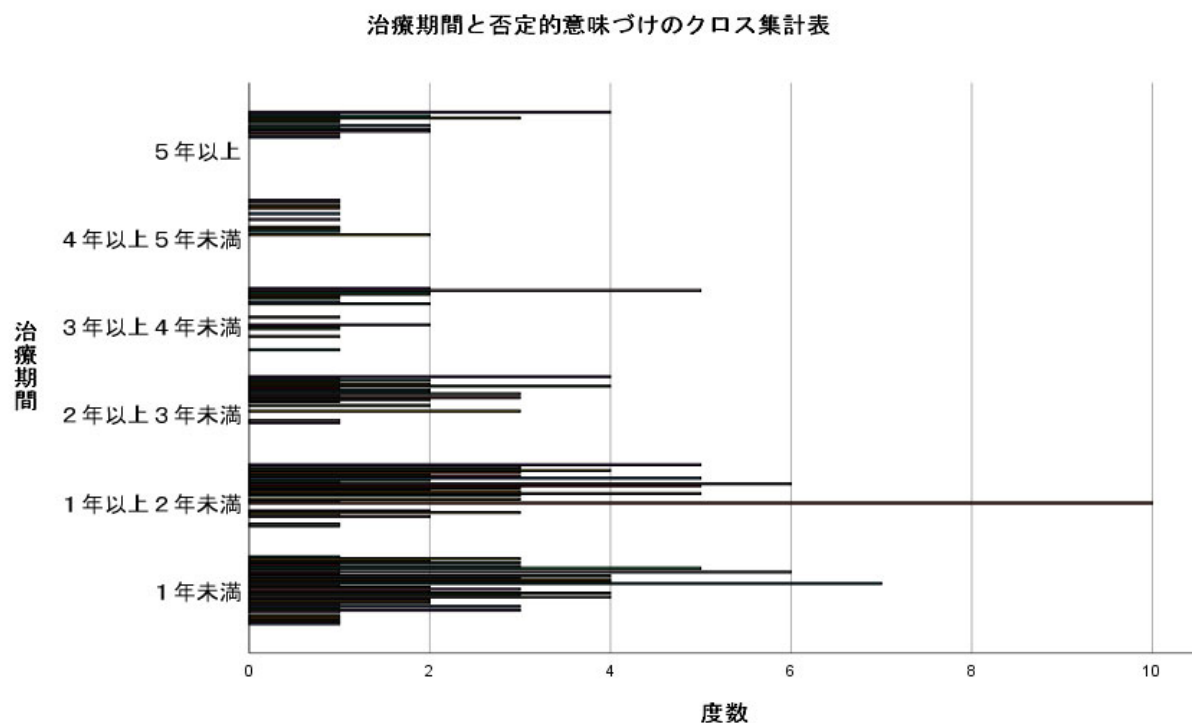
まず、調査1で実施した30項目の質問について、因子分析を行った。共通性や解釈可能性なども考慮し、2因子各10項目、計20項目からなる尺度を作成した。第1因子は、「よかったと思う」「幸せな気持ちになった」といったような、不妊治療の経験について肯定的に意味づけを行っている因子で、「肯定的意味づけ」因子とした。また、第2因子は、「治療が辛かった」「時間がかかった」「なぜ自分だけ妊娠できないのだろうと思っていた」といったような、不妊治療

の経験について否定的に意味づけを行っている因子のため、「否定的意味づけ」因子とした。また、それぞれについて信頼性係数を測定したところ、肯定的意味づけが $\alpha = .85$ 、否定的意味づけが $\alpha = .93$ となり、信頼できる値となった。

次に、治療期間と肯定的意味づけについてクロス集計表を算出した。その結果、治療期間が短い方が、より肯定的意味づけについて高く回答していることが示された（以下の図）。



続けて、否定的意味づけについても同様に、治療期間とクロス集計表を算出した。



否定的意味づけについても、治療期間が短い方が、長い方よりも否定的意味づけが高いことが示された。この結果から分かることは、治療期間が短い方が（特に1年以上2年未満）治療を肯定的に意味づけができる一方で、否定的にも意味づけをしているということが分かった。また、治療期間が長い場合には、その後妊娠をして無事に出産できたとしても、肯定的にも否定

的にも意味づけをすることがなかなかできにくいということが示された。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究では、2回のweb調査を通して、不妊治療を経験した母親たちが肯定的・否定的なさまざまな感情を抱きながらも、子育てしていることが示された。また、不妊治療の期間によって、その意味づけの度合いが変わってくることも示された。

今後は、より縦断的な視点から、出産後からどのようなプロセスを経て、不妊治療を意味づけながら子育てをしているのかについて検討を行いたいと考えている。また、支援という方向性からも研究を行いたいと考えている。前述のように、不妊治療自体も非常にストレスフルであるにも関わらず、多くの場合そのまま出産、子育てというストレスフルな状況が継続していくため、何らかの支援を行うことで、ストレスが緩和されるのではないかと考える。

上記のようなことから、今後はさらに研究を進めていきたいと考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

まず、この調査にご協力いただきました方々、ならびに日本私立学校振興・共済事業団の関係者の皆様に深くお礼を申し上げます。なかなか個人の力だけでは実施することができなかった大規模なweb調査を行うことができました。本当にありがとうございました。

この調査は、あくまでもスタート地点であると思っております。これからも不妊治療を経験したお母さんたちが、いきいきと子育てができるようなお手伝いができるような研究を行っていきたいと思っております。